

# 自分の感情を無視しないことから始まる ～ドラマ『虎に翼』から学んだ「らしさ」の解き方～



9月に完結したNHK連続テレビ小説『虎に翼』は、女性で初めて弁護士、裁判官、裁判所長になった三淵嘉子さんをモデルにした物語。主人公・寅子をはじめとする登場人物の生き方や、吉田恵里香さんによる脚本が大きな話題を呼びました。

この作品では主人公たちが「らしさ」と闘う場面が繰り返されますが、「らしさ」の呪いにかけているのは女性たちだけではなく、男性たちもまた縛られていることが多く描かれ、印象深かったシーンやセリフは数えきれないほどありました。

いくつか挙げてみると、まず、「女は働かなくていいんだから、そっちの方が得だ」と言い放った男子中学生に対して、寅子の同僚の男性が熱く語る場面です。「優等生でも不良でもない中途半端な男たちは、先生に構われることもなく、いないも同然にされている。そして、女性の社会進出によって、優秀な女とも比べられる、そこに腹が立つ思いも分かる」と。「でも、そのいらだちを向ける時、お前、弱そうな相手を選んでないか?」と言ったのです。自分の場所が奪われる焦りや不安、そこからくるいらだち。男性がこうした内面の感情を無視せずに言葉にすることができたら、「らしさ」ととらわれない関係も生まれ、「男尊女卑社会」も少しずつ変わるのではないかと思えた回でした。

主人公の弟が「僕は男として、この家の大黒柱にならない」と告げたとき、寅子は「そんなものならなくていい!」と一喝しました。それに続く「新しい憲法の話をしたでしょ?男も女も平等な

の。男だからって、あなたが全部背負わなくていい。そういう時代は終わったの」との台詞には、ハッとしました。憲法第14条の一節、「性別において差別されない」とは、すべての人が「らしさ」から解放され、人生をよりよく生きるための平等な権利であることが腑に落ちました。

その後、一家の中心として仕事に没頭する主人公は強い立場となり、家族との間に溝が生まれ、家族の本音に耳を傾けることができなくなります。強くあろうとし、強い立場についた者が、自身の特権に無自覚のまま誰かを我慢させていること、弱い立場に置かれた人を忘れがちになる過程が冷徹に描かれました。その寅子もまた、夫を亡くした悲しみや孤独感を一人で抱えていましたが、それと向き合う中で周囲との関係を再構築していきます。自分と違う部分があっても、それぞれの人生を肯定し寄り添う気持ちを持つとうとする姿は示唆に富んでいました。

最終回では、男女共同参画社会基本法成立のニュースが流れました。それから25年経った現在、いまだに「らしさ」の縛りや固定的性別役割分担がそこかしこに残っています。このドラマは、様々な登場人物が苦しみ、議論を交わす姿を通して、そうした状況は過去のことではなく、今も続いていることを表現してくれたと感じました。エンターテインメントの持つ発信力に感動しつつ、今度は私たちが寅子のように「男も女も平等」ときちんと言葉で発する番だ、との思いを強くしました。

## 啓発パネルを貸し出しています!

「DV(ドメスティック・バイオレンス)」(A2判・10枚)

ドメスティック・バイオレンスとは、配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振られる暴力のことです。パネルでは、ドメスティック・バイオレンスとはどういふものか、どのような問題があるのかなどについて、イラスト等を使って分かりやすく説明しています。

また、その他にも、「知っていますか?デートDV」「デートDV防止啓発ポスター」「わたしたちは性犯罪・性暴力を許さない!」などのパネルもあります。これらのパネルは、県内市町村、女性関連施設及び男女共同参画社会の推進に向け活動している団体などを対象に、無料で貸し出しをしています。ぜひ活用ください。

**DV**  
ドメスティック・バイオレンス

DVとは、配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振られる暴力のことです。

DVは、犯罪となる行為を含む重大な人権侵害です。

家庭内での個人的な関係において行われるため、被害化しやすい、被害が深刻化しやすいという特徴があります。DV被害となつてから起きている他人事ではない問題です。

誰もが被害者にも加害者にも傷つけないためにDVについて考えてみましょう。

●このパネルを借りたい方へ  
●このパネルを借りたい方へ

※詳しくは、With You さいたまホームページをご覧ください。  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/withyou/support/panel/index.html>

## 相談コラム 誰もが自分の人生の主人公

随分前的大河ドラマ「真田丸」で、真田幸村の「望みを捨てぬ者だけに道は開ける」というセリフがありました。

私達が生活していく中では「諦めること」「迎合すること」も時には必要な選択かもしれません。それによって、望みから遠ざかっていってしまうこともあるでしょう。それでも、小さくても確かな希望を見つけ出し、自分がその希望を捨てることさえしなければ、いつか道は開けると幸村は教えてくれているのではないのでしょうか。

不安や息苦しさや押しつぶされそうになったら、ひとりで悩まずに相談してみませんか。あなたが「自分の人生の主人公」として自分らしさを見捨てずに、望みを持ち続けられるように、私たちは脇役としてお手伝いさせていただきたいと願っています。

### With You さいたま電話相談

さまざまな悩み相談      DVに関する相談  
TEL 048-600-3800      TEL 048-600-3700

時間 月～水、金、土曜 / 9:30～20:30  
日曜、祝・休日 / 9:30～17:00(休曜日、年末年始を除く)

インターネット相談は24時間受付  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/withyou/counsel/guide.html>

## イベントカレンダー

2024年11月  
2025年2月

●講座 ※詳細はホームページをご覧ください。

2025年2月1日(土)～2日(日)  
第23回 With You さいたまフェスティバル  
県内で男女共同参画に取り組む団体が集まり、日頃の活動を発表します。

2月2日(日) With You さいたまフェスティバル講演会  
「アニメ・キャラクターのジェンダー観 ～これまでとこれから～」  
講師:須川亜紀子さん(横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授)

●セミナー&グループ相談会 ※詳細はホームページをご覧ください。

女性のためのセミナー&グループ相談会 ～わたしが選ぶ、わたしの未来～  
困難解決・緩和となるための情報を提供するセミナーを開催。同時に自らの悩みや不安を共有し語りあう機会・場を提供するグループ相談会を行います。わたらしさをアップデートしたいあなたの一歩を応援します。

今後の開催日時 2025年1月18日(土)、2月16日(日)、2月23日(日)  
会場はいずれもWith You さいたま

## 女性と女の子の「あばた一相談&あばた一広場」

今、何か悩みや不安を抱えていませんか? 顔を見せるのはイヤ、でも、誰かと話したい。こんな時「あばた一相談&あばた一広場」をのぞいてみませんか。

個別相談「あばた一相談」	2024年12月18日(土) 10:00～12:00	2025年2月5日(土) 10:00～12:00
交流会「あばた一広場」	2025年1月8日(土) 17:00～19:00	3月5日(土) 17:00～19:00



## パープルリボン・タペストリーが県内巡回中

「パープルリボン」は、女性に対する暴力のない世界を望む気持ちを表す運動のシンボルとして、世界中に広がっています。埼玉県では、県民の皆さんにパープルリボンを作成していただき、大きなタペストリー(壁掛け)を完成させるキャンペーンを実施しています。今年度は、34の市町村がキャンペーンに参加しています。タペストリーを見かけたら、ぜひご参加ください。



巡回期間 2024年8月1日～2025年3月13日

## 情報ライブラリーより

孤母社会 母よ、あなたは悪くない!  
高濱正伸 著 講談社+α新書(2008年) 請求記号:367.3/コ

本書は、著者が小学校低学年向けに作文、読書、野外体験など様々な活動を取り入れた学習教室を運営し、母親たちと接してきた経験をまとめたものです。

著者は核家族化、地縁の希薄化、夫の無理解などによって孤独な子育てを強いられている母親を「孤母」と名付けています。そして引きこもりや家庭内暴力など、子どもが引き起こすトラブルの大半は、母親がその孤独な子育てを当たり前として受け入れていることに起因するとしています。

読後、孤独な子育てを解消するための一番の有効策はDVのない家族の力だと思いました。特に、男性にこの本を読んで、様々なことを感じ、考えていただきたいと思います。

※上記の本は、With You さいたま 情報ライブラリーにて、貸出しをしています。

With You さいたま  
埼玉県男女共同参画推進センター  
〒330-0081 さいたま市中央区新都心2-2  
TEL 048-601-3111  
FAX 048-600-3802  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/withyou/>

開館時間

月曜～土曜 / 9:30～21:00  
日曜・祝日 / 9:30～17:30

休館日 / 第3木曜日、年末年始

貸出施設のご利用時間

午前 / 9:30～12:00  
午後 / 13:00～17:00  
夜間 / 18:00～21:00

※利用時間には、準備及び後片づけの時間も含まれます。



Facebook

### With You さいたま相談

電話相談 TEL 048-600-3800

DV相談専用 TEL 048-600-3700

相談時間 月～水、金、土曜 / 9:30～20:30  
日曜、祝・休日 / 9:30～17:00  
(休曜日、年末年始を除く)

### 埼玉県女性キャリアセンター

電話相談 TEL 048-601-1023

相談時間 月曜～金曜 / 10:00～11:30  
12:30～16:30  
(祝日、第3木曜日、年末年始を除く)

面談相談 予約 TEL 048-601-5810

受付時間 月曜～土曜 / 9:30～17:30  
(祝日、第3木曜日、年末年始を除く)

### ●ハローワーク求人情報の提供

求人情報の検索 月曜～土曜 / 9:30～17:30

求人情報の紹介 月曜～土曜 / 10:00～17:00

### 休館日等のお知らせ

- 年末年始の休館日 12月29日(日)～1月3日(金)
- 情報ライブラリーの閉室 12月16日(月)～12月21日(土)



With You さいたま  
ホテルブリランテ武蔵野3・4F  
さいたま新都心駅から徒歩5分 北与野駅から徒歩6分



With You さいたま vol.75 2024年11月発行

男女共同参画

# With You さいたま

11月号  
2024  
November

## 特集 P.2-4 「男らしさ」と男尊女卑依存症社会



### CONTENTS

- P.5 コラム「自分の感情を無視しないことから始まる～ドラマ『虎に翼』から学んだ「らしさ」の解き方～」
- P.5 啓発パネルを貸し出しています!
- P.5 相談コラム「誰もが自分の人生の主人公」
- P.6 イベントカレンダー
- P.6 情報ライブラリーより

パープルリボン・タペストリーが県内巡回中

「With You さいたま」は、埼玉県の男女共同参画社会づくりのための総合拠点施設です。

# 『男らしさ』と男尊女卑依存症社会

10月5日(土)にWith You さいたまで開催した「男性によるトークセッション」では、ライターの武田砂鉄さん、西川口榎本クリニック副院長(精神保健福祉士/社会福祉士)の斉藤章佳さんをお招きし、「『男らしさ』と男尊女卑依存症社会」をテーマにご対談いただきました。今回はその一部をご紹介します。

## 男性優位の社会構造 —日本は男尊女卑依存症社会

**武田** 斉藤さんは、ここ(With You さいたま)は2回目ということ

で。

**斉藤** 2回目です。5年前に、砂鉄さんと痴漢対談(\*1)を。

**武田** そうでしたね。今回のタイトルの半分にもなっていますけど、斉藤さんがお出しになられた『男尊女卑依存症社会』という本の帯に、エッセイストの小島慶子さんの名前があります。これは小島さんとの会話ででてきた言葉なんですか？

**斉藤** そうです。「さよなら! ハラスメント」(\*2)という本で、小島さんと依存症に関する対談をした時に、「もう日本は何かの依存症になっているんじゃないでしょうか」「何の依存症ですかね」「男尊女卑への過剰適応じゃないでしょうか」という話になり、その時『男尊女卑依存症社会』という言葉が生まれました。

**武田** それは自分で口にした時に、「あ、確かにそうかもしれないな」という感覚があったんですか？

**斉藤** ありましたね。私は依存症や性加害の臨床にかかわって、その根本にある生きづらさってなんだろうと考えた時に、ジェンダーの問題にぶつかったんですね。彼らは男尊女卑の価値観が根底にあって、それを行動化している人たちです。私自身も『男らしさ』や『男尊女卑』の価値観に振り回された時期があったので、その言葉を使った本を書きたいと思い、この『男尊女卑依存症社会』を書きました。「男尊女卑依存症社会」の定義なんですけど、男尊女卑の価値観に過剰適応し、その価値観で生きるのは苦しいにも関わらず、それがやめられない状態。また広義の意味では、「有害な男らしさ」や「有害な女らしさ」という社会から期待された過剰なジェンダー役割にとらわれ、それが手放せない状態を指します。

**武田** そのまま日本社会といってもいいような定義ではありませんよね。

**斉藤** 私は今、たくさん「加害者」と呼ばれる人とかかかわっていますが、これまでかかわってきたおおよそ3,000件のデータをまとめているら、四大卒で、サラリーマンで、家族がいて……という属性の人がすごく多いんですよ。盗撮の人もそうなんですけど。彼らは基本的に私となら変わりなくて、それで自分も追いつめられたりした時に、自暴自棄になって、人を傷つけることで自尊感情や自己肯定感を高めるみたいな可能性はあるようになってきました。私の故郷は滋賀県の非常に男尊女卑の強い地域で、生まれた時から、あなたは待望の男の子だから、長男だから、と聞かされて育ちました。小学校高学年くらいの時に、「人間は生まれた時に、すでに価値が決まっているんだ。男に生まれてよかった」と思いました。自分にはそんなふう、まるで呪

いでもかけられているように男尊女卑の価値観が刷り込まれていたんで、ずっと脳内に残っている部分もあると思います。

**武田** 僕は「男らしくあれ」と言われたことが一度もないんですよ。でも、僕が「マチズモを削り取れ」という本で書いたのは、そうはいつでもこの社会自体が男尊女卑で、男性優位に作られているから、自分がどういう意識でいようと公共のさまざまな空間に置かれた時に、自分は非常に優位な立場であるぞと。いろいろと勉強したり、原稿を書くようになってから、そのことをものすごく自覚するようになりました。ただ、この5年から10年の間に、語られ方は徐々に変わってきたのかなとは思っています。

(\*1)2019年3月開催 メンズプロジェクト講座「男同士が語る どうしたら痴漢をなくせるか」(With You さいたま主催)において、斉藤章佳さん、武田砂鉄さんにご登壇いただきました。  
(\*2)小島慶子 編著『さよなら! ハラスメント —自分と社会を変える11の知恵』(晶文社)2019年

## 依存症 —生きづらさや苦痛を一時的に緩和する行為

**武田** 斉藤さんは高校時代、バリバリの体育会系のサッカープレイヤーだったとか？

**斉藤** バリバリです。バリバリの競争社会。最初はそこそこよかったですね、プロになりたいと思ってブラジルに留学もした。でも、大きな怪我をして、手術しなければいけなくなって。そこから坂道を転がり落ちるように競争からドロップアウトしていきました。

**武田** 僕は中高時代、どっちも部活がうまくいかなかった人間で、高校時代も弱小バレー部で、女子バレーに「なんであんな弱小男子バレーにコートを貸さなきゃいけないんだ」と言われてたくらいなんです。中学のサッカー部時代も、ずっと控えに甘んじてまして……。でもこうやって文章を書くようになって、控えの目線っていうのは、結構大事なことだったんだと、あとになって思っています。

**斉藤** 私はずるずる転げ落ちていく時、なんとか底辺まで落ちないために、過食嘔吐を始めました。いわゆる摂食障害です。ボクサーとかも減量でよくチューイングっていう、胃に入れずに吐くというのをやるんですが、その行為を怪我の間ずっとやっていました。それをしてる間は体重、数字にこだわるので、今の自分のつらさを見なくていいというか、感じたくない。今考えると依存症(アディクション)の状態です。でも、次は逆の膝も怪我をして、もう終わったな、って。それでもっとひどくなっていきました。体重をコントロールするためにやっていた行為だったんですが、次第に自分の生きづらさやしんどさを見なくするための、自分の中にある苦痛を一時的に緩和するための行動になっていきました。



**武田** それはいつ頃、打破できたんですか？

**斉藤** サッカーをやめて、競争から降りてからです。私にとってサッカーは酔っぱらうものだったので。

**武田** 酔っぱらうものとはどういうことですか？

**斉藤** 私は勉強がそんなにできなかったんで、サッカーは優越感を感じられる唯一のもので、今考えると「酔っぱらってる」ものだったんです。でもそれが奪われたので、これからは「しらふ」で生きないといけない。しらふで生きるってすごくつらいんですよ。自分の気持ちを支えるものがなくなって、裸で道を歩いているような感じでした。

**武田** 一概には言えないですが、高校・大学とスポーツで活躍した人たちが就職活動で優位だと。なぜかといったら、彼らはやれていったらやるし、しゃがめていったらしゃがむ。そういう人たちが社会を運営していく中に入っていくわけです。体育会系社会っていうのは、まさに「男尊女卑依存症社会」と直結してるってことですよ。

## スクールカーストと盗撮男子 —「男」として承認される経験

**斉藤** 最近、盗撮で児童相談所や警察が介入する相談がすごく増えてきました。年齢の下は小学6年生、10代で多い層は高校生です。ひとつ印象深い事例があります。その男の子は共学の進学校、高校一年生のAくん。時期は二学期が始まるくらいで、クラスの中では男の子のグループ、いわゆるスクールカースト上位と呼ばれるグループができていました。AくんはそのグループのBくんから「隣のクラスにかわいい子がいるから、スマホで撮ってきてくれ」と頼まれます。Aくんは嫌だったんですけど、断るとクラスでやりづらくなるな、と。過去にいじめられた経験があったので、またいじめのターゲットにされたくないという防衛本能も働いて、スマートフォンで対象の女の子の写真を撮ったんです。



その画像をBくんに見せたら、「LINEで送ってくれ」と。ここで彼はスクールカースト上位の男の子のLINEグループとつながることができたんです。それは彼にとって、非常に大きな体験だったみたいで。

**武田** それは成功体験みたいな？

**斉藤** そう。スクールカースト上位の男の子から「男として承認された経験」になったわけですよ。「お前、勇氣あるじゃん」「男だな」と言われたそうなんです。でも要求はエスカレートしていきますよね。そのうちスカートの中の下着まで撮るようになって……。最終的には、朝の通学の電車内で盗撮をして、見つかった、警察に引き渡され、逮捕されました。スマホには数千枚の画像や動画があったそうです。盗撮は短期間で常習化するという特徴があって、彼もそうでした。「盗撮、本当にしたかったの?」と聞いたら、彼は「最初はしたくなかった」と。「なのに、なんで続けたの?」と聞いたら、「男から男として認めってもらった気がしました」と。私は高校一年生の男の子が「男らしさ」に価値を置いていることにびっくりしたんです。若い人にとって「男らしさ」って過去の、昭和世代の価値観だろうと思っていたら、いまだに一定の価値があって、今のジェンダー平等の価値観と、旧来の社会もしくは親や同世代の男の子たちから求められる「男らしさ」の価値観との間で、もがき苦しんでいる姿をそこに見ました。

**武田** 盗撮をするというのは相手の女性に対する加害性があるわけ、そこまでして認められたいとか、「男らしい」と言葉欲しがると感じているのは、なかなか理解しがたいものがあります。

**斉藤** 女性の身体の一部を勝手にモノ化して、それをホモソーシャルなコミュニティで絆を強めるために消費する。加害行為が反復される、つまり行動を繰り返すことが強化されていった要因は、確実に「承認」なんです。いわゆる「強い」と言われている男性、もしくは男性グループからの承認。それが教科書になって、行動が更新されていく。これはもうまさに依存症、アディクションのメカニズムと同じです。こういう構造が若い世代にも、そして似たようなものが私たちの世代にもあって、それが脈々と形を変えて続いているんだなと思いました。

## 「男尊女卑依存症」からの回復 —「弱さ」でつながる

**斉藤** 私が摂食障害の話ができるようになったのは、依存症の臨床にかかわるようになってからです。依存症の回復の神髄は正直になることなので、自分の弱さを正直に打ち明ける。聞いていた仲間たちは、それで力をもらえる。「あなたの弱さが他の人の力になる」というメカニズムが回復の中には働いているんです。

社会人になって一年目の時に、「回復のロールモデルを知らない」と回復が信じられなくなるから、AA(アルコール依存症の自助グループ)に行きなさい」と言われたんです。私はアルコール依存症ではないので、自分の成功体験や、うまくいった話しかできませんでした。その帰り道、10年くらい絶酒した参加者の方から、「斉藤さんの成功体験とか強い話を聴きたいわけじゃないんだ。あなたの弱い話が聴きたいんだ」と言われたんです。その時、金槌で頭を殴られたような気がしました。次に行った時、私は初めて自分の摂食障害の話をしました。親と同世代くらいのおじさんたちが、やっと話せたね、みたいな顔をして、にこにこしながら接してくれて。すごくあたたかい感じがしたんです。帰り道でも、心のあたりに、あったかいものが残っていました。アルコール依存症の方って、心の穴をアルコールで埋めてきたんです。でもそれができなくなって、彼らは自助グルー



**武田砂鉄さん**  
(ただだ ざてつ)

ライター  
1982年生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年、『紋切型社会』で第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。他の著書に『日本の気配』(晶文社)、『わかりやすさの罪』(朝日新聞出版)、『偉い人ほどすぐ逃げる』(文藝春秋)、『マチズモを削り取れ』(集英社)、『べつに怒ってない』(筑摩書房)、『今日拾った言葉たち』(暮らしの手帖社)、『父ではありませんが』

**講師プロフィール**

**武田砂鉄さん**  
(ただだ ざてつ)

ライター  
1982年生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年、『紋切型社会』で第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。他の著書に『日本の気配』(晶文社)、『わかりやすさの罪』(朝日新聞出版)、『偉い人ほどすぐ逃げる』(文藝春秋)、『マチズモを削り取れ』(集英社)、『べつに怒ってない』(筑摩書房)、『今日拾った言葉たち』(暮らしの手帖社)、『父ではありませんが』

**斉藤章佳さん**  
(さいとう あきよし)

西川口榎本クリニック副院長(精神保健福祉士/社会福祉士)  
1979年滋賀県生まれ。大卒後、アジア最大規模といわれる依存症施設である榎本クリニックにソーシャルワーカーとして、約20年にわたりアルコール依存症を中心にギャンブル・薬物・摂食障害・性犯罪・児童虐待・DV・クレプトマニアなど様々なアディクション問題に携わる。その後、2024年10月から現職。専門は加害者臨床で現在まで3000名以上の性犯罪者の治療に関わり、性犯罪被害者の家族支援も含めた包括的な地域トリアートメントに関する実践・研究・啓発活動に取り組んでいる。また、都内更生保護施設では長年「酒害・薬害教育プログラム」の講師をつとめている。小中学校では薬物乱用防止教育をはじめ、大学でも早期の依存症教育に積極的に関わっており、全国での講演も含めその活動は幅広くマスメディアでも度々取り上げられている。東京都痴漢被害実態把握調査委員、一般社団法人痴漢抑止活動センターアドバイザー。

**マチズモを削り取れ**

武田砂鉄 著  
集英社(2021年) 請求記号367.21/マ

本書は、担当編集者Kさんの怒りを著者である武田砂鉄さんが聴き取り、その怒りを引き受け、実際に町に出て調査し、考察するという「マチズモ=男性優位主義」実態検証本である。Kさんから送られてくる短文や、ふたりの会話から生まれた疑問を基に、路上、電車、トイレ、会社、結婚式場、書店、飲食店……など、公共空間における特定の場面や状態に残存するマチズモについて、事細かに考察していく。

\*上記の本は、With You さいたま 情報ライブラリーにて、貸出しをしています。

2

3

4